

信夫の鷹

信夫の鷹

中山義秀著

改 造 社 版

昭和二十三年九月二十日印刷
昭和二十三年九月二十五日發行

信 夫 の 鷹

定價 貳百貳拾圓

著 者

中 山 義 秀

發行者

平 田 貫 一 郎
東京都中央區京橋一ノ三

印刷者

淺 野 剛
東京都大田區田園調布一ノ三

發 兌

改 造 社
東京都中央區京橋一ノ三

振替東京八四〇二番
電話京橋(56)一六二〇番
五六一九番

(小高製本)

元 給 配
印 刷 所

九 社
ノ 會
町 式
路 株
淡 給
神 配
田 田
區 園
代 調
千 布
都 金
本 社
東 株
京 式
都 會
社

目次

華燭		(三)
迷路		(四九)
なすな戀		(九一)
梅花		(一三五)
常夏の客		(一七二)
殘照		(二〇四)
仇し野		(二二七)
信夫の鷹		(二五三)
後記		(二八五)

裝幀
青井辰雄

華

燭

梅がほころびそめた暖い日和に山崎は町へ出て娘^{はなだ}の嫁入仕度をととのへた。彼は少し酔つてゐた。山崎は酔ふとやたらと物を買ふくせがある。彼は白地に草花を美しく染出したあづま縮緬の羽織やらつゞれの帯やら綸子の襦袢やら麝脂のコートやら革草履やら數軒の店をまはつて一ツ時に買込んだ。老功の婦人が側についてゐたから品質も柄も間違はない。前から娘と二人でぼつぼつ買集めてゐたがこれで一通り必要な品はそろつた。

山崎がそれ等の紙包を兩脇にかゝへ酔步蹣跚上機嫌で歸つてくると洋裁の稽古歸りの縹と出會つた。

「お父うさん、それなアに」

「これか」

山崎は一つの包を娘に渡し紙包の端をひらいて羽織の一部をしめした。

「まア綺麗。これ私の物」

「うん。帯もあるし襦袢もあるしコートもある。それからこれだ」

彼はズボンのポケットに押しこんであつた紅色の革草履をひきだした。

「これで欲しい物は揃つたらう。あゝせいせいした」

縹は着物らしい着物をもたなかつた。戦時中手に入れがたい爲でもあつたがそれにしても母があれば妙齡の娘のために一通りの物は揃へておいたであらう。鰥暮しの山崎は結婚の期日がせまるにつれてそれを苦にやんでゐたが知友人の世話や贈與で次第に形をととのへてきた。娘はもとより一生懸命である。町へ出て適當な賣物があれば父に報らせる。せつかく良い物があつても金が無ければ仕方がない。それでも和洋服とも何とか形だけはついた。親子二人でする貧弱な嫁入仕度。

「まあどつかで、祝盃をあげよう」

山崎が娘をつれて呑屋へ寄らうとすると、

「お父うさんはもう酔つばらつてるぢやないの。家に配給のビールがあるから歸りませう」

山崎は初はそれほど娘の仕度に熱心ではなかつた。娘に乞はれれば金はだしたが自分から品物を買ひに出るやうなことはなかつた。金が入ればつい下らなく飲んでしまふ。縹は一つでも多く

持つてゆきたいが父にはなか／＼言ひだしにくい。それに服にしる靴にしる皆ヤミの品ばかりで驚くばかり値段が高い。仕方がないから古い物をこはして仕立直したり編物をときほぐして好みの色に染めたりしてゐる。

夜眠れぬ山崎が明け方まで書齋にすわつて窓をひらいてみると娘の部屋に電燈がついてゐることがある。消し忘れたのかと部屋へいつてみると繧は古い布やヤミの薄い木綿地などを狭い部屋の中いっぱいに散りひろげてせつせと下着を縫つたり腰紐を作つたりしてゐる。

「まだ起きてゐたのか」

「はゝ」

寝不足で眼が眞ツ赤だ。山崎は母がなく手助けする者もない彼女の姿に憐みをおぼえる。

「しかし、自分の嫁入仕度を自分の手でやつてゆくんだからいゝやな」

「えゝ」

繧は羞づかしさうな笑を洩らす。嫁ぐ娘心とはそのやうに楽しいものであらうか、晝は茶の湯活け華和洋の裁縫の稽古に通ひ夜もねむらず働きつゞけるとは。

山崎は學校を出て就職すると同時に結婚した。じつは數年間ひそかに狎れ親んだ女との間を表

向きなものとしただけで式らしい式も何もあけなかつた。女は嫁入道具もなく彼のところへやつてきたがそれでも二人は楽しかつた。山崎は戀がみたされると今度は名聲にあこがれるやうになつた。そのため職をすてたり妻子を郷里へ歸したりした。貧と病と失意と死とそのやうな嵐が十餘年つゞいた。纖弱だつた妻はたうとうそれにたへないで病死した。山崎は男女二人の遺兒を自分の實家へ預けて奮闘した。そしてどうやら世間に名を知られるやうになつた。生活のめどがつくと二人の子供を手許にひきとつた。兄の健が十九歳妹の縹が十六歳。健は中學を出たが縹は女學校の三年生だつた。

翌年の夏山崎は兄妹をつれて山間の温泉地へ避暑に行つた。そこで縹は同宿の醫學生から戀されるやうになつた。歸京後學生の親から結娘の申込があつた。縹をひきとり女一通りの嗜みを仕込んだ上本人の希望で上級校へ通はせてもいゝといふ。學生の家は鑛山主で相當の資産家だつたから鰥寡しの山崎の手許においては自家に相應する主婦としての教養をそなへるに覺束ないと思つた故であらう。年若くて父となつた山崎は年頃になつた子供達との生活に手を焼いてゐたから願つてもない幸ひだつた。

しかし山崎は熟考の末この縁談を斷つた。相手にも條件にも不足はなかつた。たゞ他人の手か

ら手へ恰も犬猫をくれてやるやうにして渡されてしまふ縹の身の上が不憫だつたからにすぎぬ。十歳で母をうしなひ父と別れた縹はまだ親の眞實の愛情に充分浴したとはいへない。これは形の上の幸不幸より人間精神の成熟の上で後々大きな蹟きになるのではなからうかと案じられた。それに縹の心もまた結婚にたいして何の準備もできてゐなかつた。彼女は結婚の話が具體的になつてくると相手の學生が訪問してきても姿を現さなかつた。山崎がさがしにゆくと彼女は水兵服に水色のネクタイをつけた女學校の制服姿で奥の間の簞笥のかけに身をひそめ青くなつて顫へてゐた。

縹が女學校をでると山崎は東京から湘南の一都市へ居を移した。健と縹とはそこから専門校へ通つた。健が最初の學徒動員で海軍へはひつた。その頃から戦局が逼迫してきて敗戦末期の相をていするやうになつた。國內から若者といふ若者が姿をけして筋肉の定まらぬ未成年や病弱者ばかりが後にのこされた。さうなつてみると山崎は最初の縁談をことわつた事を内心悔いるやうになつた。縹の學校が空襲で焼失した。挺身隊で働いてゐた軍需工場も破壊された。彼女は父の家にとどまつて女中と一緒に附近の村々へ野菜の買出しに行つたり郷里へ米をとりに行つたりした。父の心配とは反對に彼女は元氣で朗かで結婚のことなど意に介さないやうだつた。

出身女學校の教師から縹に會ひたいと云つてきた。彼女が上京して學校へゆく途中空襲警報がでて附近に爆弾がおちた。

「とても怖かつたわ」

と歸つてきて山崎に報告したが半面そのスリルを楽しむやうでもあつた。縹はやさしかつた母と違ひ父の血をうけついだものか冒險を喜ぶところがあつた。教師の話は彼女の縁談についてであつた。一つは資産家の息子で大學出の主計中尉、老父が中風で倒れた爲その看護に嫁を迎へたいといふのである。もう一つの口は三十すぎの技師だつた。いづれも縹の卒業寫眞をみて申込んできたのださうである。山崎は心動かないでもなかつたが結局その話にはのらなかつた。それよりも彼は亡妻の老母から云つてきた縁談のことを考へてゐた。亡妻の實家の本家にあたる家に正彦といふ二十七歳の青年がある。地方の専門校を首席で出て甲州にある木製飛行機工場の主任次席を勤めてゐる。その嫁に縹をほしいといふのだ。

山崎が學生で亡妻と戀仲だつた頃本家は町内一の富裕な舊家だつた。それが時勢の推移と當主の放蕩のために次第に家産が傾いてきて主人が亡くなつた時は無一物となり廣い家屋敷まで借金
の抵當になつてゐた。三人の男子と一人の女子があつたが人の情で學校を出た。長男は出征して

ビルマで戦死した。次男は結婚して他郷に住んでゐる。三男の正彦は俸給をためて借金をかへし家屋敷をとりもどした。そのため寡婦となつた母の寵愛を一身にあつめてゐる。健や縹は彼と幼馴染だつた。正彦は早くから縹を妻にのぞんでゐた。周囲でもそれをゆるしてゐた。しかし自家の没落と山崎にたいする遠慮とから申込をしかねてゐた。今度家屋敷をとりもどし世間にたいする名譽も恢復されたので亡妻の老母にあたつて山崎の意嚮をさぐらせたわけだ。

亡妻の老母は亡妻を生むと同時に寡婦となつた。主人が大醉して頓死したからである。老母は老いた身になつながら、婚家にとゞまつて娘を育てあげた。その一粒種子を山崎のために奪はれた。山崎は代りに長男の健を彼女の籍に移した。しかし健は出征して生死のほども覺束ない。彼女が頼むところは孫娘の縹一人である。それを縁家の正彦にめあはせれば正彦は篤實な青年だから彼女の老後もみてくれるだらうといふ老母の考だつた。

老母は二十一、二で寡婦となつたため六十歳をとうに過ぎてゐながら今だに娘のやうなうぶな心をもつてゐる。彼女はそくばくの田を小作人に作らせ家賃のあがり細々と生きてきた。彼女の唯一の希望ははやく健が成長して自分をひきとつてくれることだつた。彼女は山崎の世話になりながらなかつた。娘が死んでしまつた以上彼との縁は一應切れたものと考へてゐるのかも知れ

ぬ。

山崎はこの老母の問合せに自分としては異存はないと返事をだした。縹には自分からも勧めるが郷里へ彼女が行つた場合老母からも勧めてくれと書いた。山崎が諾と答へたのは手輕な結婚を望んだからではない。又不義理をした老母の境遇をあはれんだからでもない。彼は娘の結婚について考へつくした果安全確實を第一の目標とするやうになつた。結婚による娘の榮達や出世を願はなかつた。たゞ娘の結婚生活が平和でありその將來が仕合せでありさへすればよかつた。そのためには相手の人柄がよくわかつてゐて娘を最も愛してくれる穩健着實な人物であることが必要だつた。正彦ならば身許がわかつてゐるし幼馴染であれば特別な親情も感じるだらうし若しもの場合親類縁者も黙つて見てはゐまい。つまり山崎としては最も平凡な結論に達したわけだ。最愛の娘にたいする凡父の至情である。山崎は悲慘だつた自分の半生をかへりみただけでも身慄ひがした。彼は三十餘歳の若さで世路の艱難にたふれた母の運命をどんなことがあつても娘の上にくりかへさせたくなかつた。山崎は正彦の縁談を縹に語つて娘の意嚮を問うてみたが彼女は笑つて答へなかつた。

この時分から學徒出身の將校や下士官が山崎のところに寄集つてくるやうになつた。敵艦隊に

海上を封鎖されて外へ出られなくなつたせゐもあるし敵の上陸作戦にたいする沿岸防備の軍隊が多くなつた爲でもあつた。彼等は三日乃至七日毎の休暇に酒や罐詰や菓子煙草などをもつて遊にやつてきた。食糧に困つてゐたのでそれ等の贈物は何よりありがたかつた。彼等の方でも窮屈な軍隊生活を脱して家庭のあたゝかい自由な空氣を呼吸できることが大きな慰樂であるらしかつた。山崎の家庭は三人暮しだから氣安くもあつた。

山崎の遠縁の青年が滿洲から東京の大學へ入るために彼をたよつてきた。彼は若い男の同居することを迷惑に思はないではなかつたが他に行き處がなければ斷るわけにもゆかなかつた。又附近の山林から燃料をあつめさせたり買出しに使つたりするには便利だつた。それやこれやで山崎の家庭は俄に賑になつた。

士官達の中で纏に思ひをよせ山崎に結婚を申込む者があつた。知人をたのんで彼の意嚮をきく者もゐた。若い女のところに青年が集つてくれればかういふ現象がおきるのはやむをえない。山崎は愛が自然に成立するなら自分は反對しないと遁げた。結局最後の決定は娘の選擇にまかせるよりほかはない。鳥獸でも相手をえらぶやうに娘も自然の資質にしたがつて適當な相手をえらぶであらう。それが彼女の運命となる。山崎は旅路で纏の母と遇つた時一瞥して胸をとどろかすもの

があつた。彼は彼女との間にある宿命的なつながりを感じた。彼はそのつながりにみちびかれて盲人のやうに彼女の生家をたづねて行つた。それを宿世の縁とよぶのかもしれない。しかもその宿世の縁に結ばれた者がはたして幸福かどうかは分らぬ。山崎の場合それはむしろ不幸に終つた。しかしたとひどんなに不幸だつたにしろこれこそ我が妻だと思ふ女を此の世に見出しえた喜びに換へうるものが他にあるだらうか。

縹の生涯がこの後どのやうな展開をもたうとも愛に忠實である以外の生活を彼女に想像したくはなかつた。といつて母に似た運命を辿らせたくもない。山崎はいつもこの十字路にきて佇立し娘の結婚について深い思案にくれてしまふ。人爲のおよばぬところだつた。彼は二人の子供が幼かつた頃自身無信仰者だつたにも拘らず彼等を教會へ通はせた。幼時の素朴な信仰が將來彼等の生きる上の道しるべともならんことを願つたためである。山崎の過去のうちで一番不幸な時代だつた。彼はその時最高の努力をいたしてもなほ妻子を安らかに養ひえない自分の無力に絶望してゐた。

優秀な青年達が山崎の前にあらはれてきたにも拘らず彼はやはり正彦を第一の候補者に考へてゐた。しかし彼は正彦をよく知らなかつた。正彦の幼い頃會つたことがあるかもしれないが